

正徹「なぐさめ草」(松平文庫本)注釈(上)

稲田利徳

解 説

歌僧正徹(永徳元年―長祿三年)に「なぐさめ草」と称する紀行文が現存する。この作品は、東国旅行を思い立った正徹が、応永二十五年(一四一八)春三月末に都を浮かれ出て、やがて逢坂の関を越え、近江・美濃から尾張の黒田を経て、さらに清須に滞在、土地の翁や越の国へ旅する途中の童形達との談話や「源氏物語」談義などの様子を綴ったもので、同年六月頃までで閉じられている。

「なぐさめ草」の伝本は、扶桑拾葉集系統と松平文庫本系統に大別される。前者に属する伝本には、扶桑拾葉集本、これをもとに転写したとおぼしき群書類従本、祐徳神社寄託中川文庫本(「桑弧」収録)などのほか、やや系統を異にするが、早稲田大学図書館本も、この系統に属している。これに対して、松平文庫本系統は、島原市立図書館松平文庫本のみ孤本である。

両系統を比較してみると、その本文異同は、書写階梯における誤写で生じたものではなく、大幅なものである。これは作者自身の推敲、追加などを考慮に入れなければ説明のつかない性格の異文で、両系統は初稿本と再稿本とに位置する伝本と思われる。

この点に関しては、すでに拙稿「正徹の『なぐさめ草』の諸本と成立」(岡山大学教育学部研究集録、第四十九号、昭和五十三年七月)

で実証したように、扶桑拾葉集本系統の方が初稿本の姿を伝え、松平文庫本系統は、その後、作者自身が用例の追加や表現の削除、推敲、和歌の差し換えなどの手を加えた再稿本とみなされる。

今回行なう、この「なぐさめ草」の注釈は、再稿本の松平文庫本を底本に、扶桑拾葉集本系統との校合をもって校訂本文を作成し、その語釈、通釈を企図するものである。

なお、島原市立図書館松平文庫本の「なぐさめ草」の書誌は以下の通りである。

縦二七・五糎、横二〇・一糎。袋綴写本一冊。表紙は薄青色下地に唐草模様入り。題簽は左肩に「慰草」と貼付。本文料紙は斐紙。一面は一〇行書き、和歌は一首一行書き。墨付一八丁。江戸初期頃の書写本で、松平文庫本の多くの写本にある「尚舎源忠房」「文庫」の蔵書印が巻尾にある。なお、この「慰草」は、三浦三夫氏の手で翻刻されている(『慰草(松平文庫本)』、昭和四十四年三月刊。私家版)。

凡 例

一、本稿は正徹の紀行文「なぐさめ草」の注釈である。

一、底本には島原市立図書館松平文庫本「慰草」(一一六一―四一)を用い、次の方針で校訂本文を作成した。

- (1) 漢字・仮名を原則として通行の字体にかえ、新字体のある漢字はそれを用い、濁点・句読点を施した。
 - (2) 底本の仮名を漢字に改めた場合は、表記を改めた本文の右側にもとの仮名を記した。漢字の読みを()の内に示した所もある。
 - (3) 仮名遣いは原文のままとし、送り仮名を補った場合は()内に記入した。また歴史的仮名遣いと一致しない場合は、()を付して歴史的仮名遣いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。
 - (4) 反復記号は底本のままとし、踊り字の場合は、もとの仮名に直し、右側に「、」を付した。
 - (5) 底本の丁数は省略し、本文も適宜改行した。
 - (6) 適当な箇所では区切り、番号と内容に即して見出しを付けた。
- 一、校異・校訂本文は次の原則で作成した。
- (1) 校合伝本としては、早稲田大学図書館本(略称「早」)、扶桑拾葉集本(扶)、中川文庫本(中)、群書類従本(群)の四本を用いた。
 - (2) 異なるあるときは、その文字や表記の右肩に番号を付し、校異欄に異同を記した。ただし、さしたる意味もない独自異文や明らかに誤字などは校異欄に掲げなかった。
 - (3) 底本の本文を他の伝本で校訂したときは、「一」でそれを示した。
- 一、松平文庫本の翻刻を御許可くださった、島原市立図書館と島原市教育委員会に対して、厚くお礼を申し上げます。

一 旅立ち

往にし弥生の()末かとよ、根に帰り、古巢を急ぐ花鳥の身さへ、

跡とどむべき方なくなりぬれば、誘ふ水の哀れむ縁に任せつつ、都をさすらひ出(で)て、関の此方まで迷ひ来し哉。もとより、かかる世捨て人は、いつかは爰と定むべき宿もあらましを、墨の衣のあさはかに、ただ夷の姿をのがるるばかりにて、蝙蝠の、鳥にも鼠にもあらざるごとくならず。あるいは、玉の砌の尊きに臨み、あるるは、民屋の賤しきに到りつつ、宮の内を去らぬ事に成(り)ぬるなるべし。しかあれば、四方の国の境遠き里には、知れる方便もなくして、行く末心細しとも云(ひ)ぬべし。関の岩門今日ぞ踏みならし侍る。

心こそ跡に引かるれ旅人の駒だになづむ関の岩門

〔校異〕①(の)―底本ナシ。早・扶・中・群の諸本で校訂。②いつかは―いつくかは(扶・中・群)③の―ナシ(扶・中・群)。④に―にて(扶・中・群)。⑥かはほり―かうほり(早・扶・中・群)。⑦さる―ぬか(早・扶・中・群)。⑧ならし―にして(早・扶・中・群)。

⑨ナシ―世のことわざにしたかひきぬれば四十年のなみ身にかゝるまで(早・扶・中・群)。

〔語釈〕○弥生(の)末―陰暦三月末。惜春の時節。○根に帰り、古巢を急ぐ花鳥の身―「花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき」(千載集・春下・崇徳院)や「ねにかへりふるすをいそぐ花鳥のおなじ道にや春も行くらん」(新千載集・春下・為定)などを踏まえる。〔参考〕「花悔帰根無益悔、鳥期入谷定延期」(和漢朗詠集)。○誘ふ水の哀む縁―「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」(古今集・雜下・小町)による。○関の

此方―「おとは山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな」

(古今集・恋一・在原元方)。○墨の衣あさはかに―「墨の衣」は僧侶の墨染の衣。ここは僧侶でありながら、仏道修行に精進しないさま。

「あさ」は「浅し」と「あさはか」の掛詞。○夷の姿―都の人が東国人を指している語。粗野な田舎武士。荒武者。○蝙蝠の、鳥にも鼠にもあらざるごとく―僧侶とも俗人ともつかぬ中途半端な姿の比喩。

「蝙蝠、似二鳥與レ虫之形一、為レ彼而欺レ人、故契経喩二末世比丘一、似レ僧非レ僧似レ俗非レ俗曰二蝙蝠比丘也」(下学集上)。「仏蔵経二、是ヲ鳥鼠レ比丘ト云リ。鷓鴣ノ鳥ノ数ニ入ントスレバ、『我ハ土ニスムナリ』トテ、穴ニ入、土中ノ役ヲ遁ントテハ、『我ハ空ニコススメ』トテ、飛出。誠ニハ、鳥ニモアラズ、獸ニモアラズ。其身ハクサクシテ、黒闇ヲ願フ。是ヲ破戒ノ比丘ノ、王者ノ公役ヲ遁ントテハ、『我ハ仏弟子、比丘也』ト云ニ、戒ヲ不レ守シテ、『我ハは大乗ナリ』ト云テ、自恣、布薩等ノ、如法ノ比丘ニハツラナラズ。其身不淨ニシテ、罪闇ノ中ニ譬レ有。末代ハ比丘、比咎難レ遁。ハズカシカルベキコトヲヤ」(沙石集卷四)。○玉の砌―「砌」は軒下や階段の下の敷石のある所。ここは玉を敷きつめたような貴人の庭をさす。○関の岩門……踏みならし―「相坂の関のいはかどふみならし山たちいづるきりはらのこま」(拾遺集・秋・大武高遠)を踏まえる。○「心こそ」の歌―逢坂の関所で駒が行きなずむ姿と自身の都を離れ難く思う心情とを重層させて詠歌。「ひく」は「駒」の縁語。

〔通釈〕さる三月末のことであつたらうか。根に帰り、古巢に帰ることを急ぐ花や鳥のような我が身さえも、住み処を定めるすべもなくなつたので、私を誘ってくれる水のような哀憐の情の縁にまかせながら、都をさすらい出て、逢坂のこちら側までやって来た。もとより、私のような世を捨てた人間にとっては、いつかはここが最後の住み処と定められる宿でもあればよいのだが、墨染の衣の色が浅いように、修行をおろそかにして、ただ荒武者姿でないといっただけで、蝙蝠の

ように、鳥とも鼠ともつかぬ半僧半俗の様子で、ある時は身分の高い人の屋敷に出かけ、ある時は、民家の身分の賤しい所に到りながら、都の内を離れることもなくて過ごしてきた。だから、四方の国々の境の遠い里には、よく知つた、頼りにする人もなく、(このまま旅に出ても)行き先が心細い。逢坂の岩門を今日、踏みしめたことよ。

私の心までも都に引き寄せられることだ、旅人の乗った駒でさえも行きなずむというこの逢坂の岩門で。

〔考〕初稿本の扶桑本系統には、〔校異欄〕⑨に示したように「世のことわざにしたかひきぬれは、四十年のなみ身にかゝるまで」があるが、底本にすべてない。これは底本の単純な誤脱か、再稿段階で意図的に削除したのか問題となる。「草根集」(巻二)に、永享四年(一四三三)九月尽日、將軍足利義教の東国下向の御伴をして帰洛した山名熙貴から「うつの山の葛かづら」を贈られた正徹の回想「いにしへ廿六歳にて、東國へ下向せしことを思ひ出て」と矛盾するとの考えも成り立つ(井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』)。あるいは矛盾するので再稿本で削除したことも想定できる。

二 志賀から鏡山へ

志賀の浦廻に打ち出(で)て見れば、比叡の大嶽・長等の山、ただ此(の)麓の霞に続き、そこはかとなく煙りわたれる四方の木の芽の春の嵐に、なを雪と散(り)くる花も、春を誘ひ顔に、浪の上に散(り)敷きたる、ま(こと)に漕ぎ行く舟の跡見ゆるばかり也。

山風も桜はよきよ鳩の海に春行(く)浪の花は有(り)とも

守山と云(ふ)所は、いたく心もとどまらず。杜(もと)の陰(かげ)の一村(むら)にて、市女(め)・商人(あき)の物騒(おそろ)しがしきのみ也。「時雨(とき)もいたく」などおぼゆるも、今は時(とき)ならず。

露(つゆ)ながら身(み)こそ洩(も)れぬれ守山(もりやま)の下葉(した)残(のこ)らぬ春(はる)の恵(めぐ)みに

今夜(こんや)は鏡山(かがみ)近く宿(しゆく)りぬ。馴(な)はぬ旅(たび)とにや思(おも)ふ方(かた)の夢(ゆめ)をだに見(み)せざるは、やうく老(ら)の眠(ね)りにやとおほゆべし。「年(とし)経(へ)ぬる身(み)は」など眺(なが)むる程(ほど)、有明(ありあけ)の月(つき)さし出(で)ぬ。

鏡山(かがみ)春(はる)の旅(たび)寝(ね)の在(あ)り曙(あけ)に月(つき)も老(ら)ぬる影(かげ)ぞ霞(かす)める。

〔校異〕①そこはかとなく一(ひと)ナシ(扶・中・群)。②春(はる)の風(かぜ)になをー風(かぜ)より(早・扶・中・群)。③雪(ゆき)ーナシ(中)。④ま(こと)ー底本(そこ)「まに」。他本(ほか)で校訂(きょうてい)。⑤守山(もりやま)とー守山(もりやま)など(早)。⑥ならすーならすや(早・扶・中・群)。⑦露(つゆ)なからー君(きみ)か世(よ)に(早・扶・中・群)。⑧めぐみにーめぐみを(早・扶・中・群)。⑨鏡山(かがみ)ーかかみの山(やま)(早・扶・中・群)。⑩宿(しゆく)りぬー宿(しゆく)りとりぬ(早・扶・中・群)。⑪夢(ゆめ)をー夢(ゆめ)(早・扶・中・群)。⑫みせざるはーもなし(早・扶・中・群)。⑬やうく……出(で)ぬーナシ(早・扶・中・群)。⑭影(かげ)そかすめるー影(かげ)やかすま(早)。

〔語釈〕○志賀ー近江国(おうみ)の歌枕(うたまくら)。今の滋賀県(しが)大津市(おおい)。琵琶湖(びわこ)の西南岸(せいなんがん)の地(ち)。○比叡(ひゑ)ー比叡山(ひゑさん)。京都市(きょうと)の東北(とうほく)、京都府(きょうと)・滋賀県(しが)の境(さかい)にそびえる山(やま)。古来(こらい)、王城(おうじょう)鎮護(ちんご)の靈山(れいざん)として有名(ゆうめい)。山嶺(さんりやう)に二つ(ふた)の高所(たかところ)があり、東(ひがし)を大比叡(おほひゑ)または大岳(おほたけ)、西(にし)を四明岳(しめいだけ)という。東(ひがし)の中復(なかつまがひ)に天台宗(たいたいしゆ)の繪本(えほん)山延曆寺(やまのえんりき)がある。○長等(ながたう)の山(やま)ー近江国(おうみ)の歌枕(うたまくら)。今の滋賀県(しが)大津市(おおい)、三井寺(さんせい)の背後(さかた)にある山(やま)。「乍(は)ら」「長(なが)し」を掛(か)けることが多い。○四方(よしかた)の木(き)の春(はる)ー「春(はる)」は「張(は)る」と掛(か)ける。〔参考〕「かすみ行くよものこの

めもはるばると花(はな)まつ山(やま)にかへるかり金(かね)」(新拾遺集(しんしやくいじふ)・雜上(ざじやう)・雅經(みやの)経(きやう))。○漕(そう)ぎ行く舟(ふね)の跡(あと)ー「花(はな)さそふひらの山(やま)かぜ吹(ふ)きにけりこぎ行く船(ふね)のあと見(み)ゆるまで」(新古今集(しんここんじふ)・春下(はるした)・宮内卿(みやうちけい)による。〔参考〕「世(よ)の中(な)をなにたたとへむあさほらけこぎゆく舟(ふね)のあと(の)しら浪(なみ)」(拾遺集(しやくいじふ)・哀傷(あいしやう)・満誓(まんせい))。○「山風(さんかぜ)も」の歌(うた)ー「鴉(からす)の海(うみ)」は近江国(おうみ)の歌枕(うたまくら)。今の琵琶湖(びわこ)のこと。「浪(なみ)の花(はな)」は浪(なみ)の飛沫(ひしぶ)を花(はな)に比喩(ひよ)したもの。

この歌(うた)は「春風(はるかぜ)は花(はな)のあたりをよきてふけ心(こころ)づからやうつろふと見(み)む」(古今集(ここんじふ)・春下(はるした)・藤原(ふじわら)よしかね)に発想(はつしやう)を学(まな)ぶ。〔参考〕「吹(ふ)く風(かぜ)にあつらへつくる物(もの)ならばこのひととはよきよといはまし」(古今集(ここんじふ)・春下(はるした)・読み人(よみひと)しらず)。○守山(もりやま)ー近江国(おうみ)の歌枕(うたまくら)。今の滋賀県(しが)守山市(もりやまし)のあたり。「漏(も)る」と掛(か)け、露(つゆ)や時雨(とき)を詠(よ)むことが多い。○市女(いちめ)ー市場(いちば)で物(もの)を商(あ)う女(め)。○時雨(とき)もいたくー「しらつゆも時雨(とき)もいたくもる山(やま)はしたばのこらず色(いろ)づきにけり」(古今集(ここんじふ)・秋下(あきした)・貫之(つらゆき))。をさす。○「露(つゆ)ながら」の歌(うた)ー守山(もりやま)の露(つゆ)によせ、あまねき春(はる)の恵(めぐ)みに、我が身(み)だけ洩(も)れた歎(なげ)きを吐(つ)露(つゆ)。〔参考〕「霜(しも)おける老木(らうぼく)のかげのこ草(こくさ)まで春(はる)のめぐみにもらさずもがな」(宝治百首(ほうじひゃくしゆ)・成茂(なりしげ))。「いまは身(み)のはるの恵(めぐ)も時(とき)過ぎてふりぬるやどの花(はな)白雪(しろゆき)」(文保百首(ぶんぽうひゃくしゆ)・冬平(ふゆへい))。○鏡山(かがみ)ー近江国(おうみ)の歌枕(うたまくら)。今の滋賀県(しが)蒲生郡(ふゆへしぐん)、三上山(さんかみ)の東(ひがし)にある山(やま)。「映(うつ)る」「見る」「澄(す)む」などの語(ことば)を用(もち)いて詠(よ)むのが一般(いぱん)。○思(おも)ふ方(かた)の夢(ゆめ)をだに見(み)せざるはー「恋(こ)わびて泣(な)く音(ね)にまがふ浦波(うらなみ)は思(おも)ふ方(かた)より風(かぜ)や吹(ふ)くらむ」(源氏物語(げんじものがたり)・須磨(すま)を本歌(ほんか)にした「そでにふけさぞなたびねの夢(ゆめ)はみじ思(おも)ふかたよりかよふ浦(うら)かぜ」(新古今集(しんここんじふ)・羈旅(かりりよ)・定家(じやうけ)を踏(ふ)まえる。○老(ら)の眠(ね)りー「老(ら)眠(ね)早(はや)覚(さ)常(じやう)残(のこ)夜(よ)、病(やま)力(ちから)先(ま)衰(すい)不(ふ)待(たい)年(ねん)」(和漢朗詠集(わかんらうぎやう))。○「年(とし)経(へ)ぬる身(み)は」ー「鏡山(かがみ)いざ立ちよりて見てゆかむ年(とし)へぬる身(み)はおいやしぬると」(古今集(ここんじふ)・雜上(ざじやう)・読み人(よみひと)しらず)をさす。○「鏡山(かがみ)」の歌(うた)ー春霞(はるかすみ)にかすんで光(ひかり)の弱(よ)い月(つき)を、年老(とし)いた我が身(み)と重ね(かさ)ねる。「鏡(かがみ)」と「影(かげ)」「霞(かすみ)む」が縁語(えんご)。「月(つき)」が「老(ら)い」と関連(かんれん)する「おほかたは月(つき)をもめでしこれぞこのつもれば人(ひと)のおいとなるもの」

〔古今集・雜上・業平〕の歌も念頭にするか。

〔通釈〕志賀の浦廻に出てみると、比叡の大岳や長等の山が、そのままこの麓の霞の中に続いており、なんとなくほんのりけむっている四方の木々の芽が張り、春の嵐に、まだ雪のように散散ってくる花も、春の去るのを誘っているかのよう浪の上に散り敷いたさまは、まさしく（歌によまれたように）、漕いで行く舟の跡が見えるほどである。

山風も桜の木を避けて吹いておくれ、鳩の海に春が去って行く浪の花を吹くことがあっても。

守山という所は、特に心ひかれることもない。杜の陰にある、ひと村の里であって、物売り女や商売人が騒々しくしているだけである。「時雨もいたく」という古歌を思いうかべるものの、今はまだその時節ではない。

はかない露さながらの我が身には洩れてしまったことよ。守山の下葉までも残らず与えるという春の恵みに。

今夜は鏡山の近くに宿をとった。馴れない旅のせいであろうか、私の思っている方（都）の夢さえも見せてくれないのは、しだいに老の寝覚めをするようになったためかと思われる。「年経ぬる身」はやはり老いたのだと、物思いながら眺めているうちに、有明の月がさし出てきた。

この鏡山で春の旅寝をしていると、空に出た有明の月までも年老いたのか、光が霞んで弱っている（私も同じように年老いたが）。

〔考〕○校異⑬で示したように「やうく……有明の月さし出ぬ」までの本文が扶桑本系統にみえない。「鏡山」の歌との関連を円滑にするため、再稿本で追補した本文か。○「露ながら」の歌の初句は、扶桑本系統は「君か世に」と異同がある。これは「洩れぬ」との縁語仕立てにするため「露ながら」と推敲したものである。○守山という歌枕で、「いたく心もとどまらず」と著名な歌枕に感興を催しているが、この態度は、「一条良基の、「小島のくちずさみ」での「もる山

につきぬ。名はことくしけれど、さして見所なし」と通ずる所がある。

三 武佐から犬上へ

武佐の宿とかやを過ぎて、愛知川にかかり侍るに、道の傍にけしき木高き杉村に、神ぐしき鳥井など立てる有（り）。小田返す賤の男に問へば、「老蘇の森」と云（ふ）。げに四十年の坂も苦しき道なれば、しばしうち休みつつ、

名を聞くも袖こそ濡るれ今は身にかかる老蘇の森の下露

犬上・〔鳥籠〕の山・不知哉川など、道行きぶりに尋（ね）てぞ見侍（り）し。

日数経る花は塵とも積らじを有（り）とや払ふ鳥籠の山風
不知哉河いさや我が名を洩らすとも誰かは知らむ知る人もなし

犬上の名もしるく、里びたる犬どもの、旅人に向ひて、おどろくしく咎むるもおかし。

暮（れ）ぬ間に人な咎めそ犬上の里は有（り）とも宿は借らじを戲言なるべし。

〔校異〕①かたはらにーかたはら（扶・中・群）。②有小田ーあるを田（扶・中・群）。③云ーいふに（早・扶・中・群）。④底本「やみ」、

諸本で「やすみ」と校訂。⑤かゝる―かはる(扶・中・群)。⑥〔鳥籠〕―底本「床」。諸本で校訂。⑦犬上……おかしナシ(早・扶・中・群)。⑧ナシ―など(早・扶・中・群)。⑨なるべし―になりぬ(早・扶・中・群)。

〔語釈〕○武佐―滋賀県近江八幡市光寺町のあたり。蒲生郡のほば中央の中山道沿いに位置した交通の要所。宿としても著名。○愛知川―小椋山の山中に発し、愛知・神崎の二郡を貫流して琵琶湖に注ぐ川。○神々しき鳥井―光源氏が野宮を訪れたときの「物はかなげなる小柴を大垣にて、板屋ども、あたりく、いと、かりそめなり。黒木の鳥居どもは、神くしく見渡されて、わづらはしき気色なるに」(源氏物語・賢木)を想起していたか。○老蘇の森―近江国の歌枕。今の滋賀県蒲生郡安土町老蘇の奥石神社の森。「老」と掛詞にしたり、郭公も詠み込む。「参考」「あづまぢのおもひでにせんほととぎすおいその森のよはの一こゑ」(後拾遺集・夏・大江公資)。○「名を聞くも」の歌―「老蘇の森」の「老」を重ねての述懐。「かかる」は「かくある」と露が「かかる」を掛ける。○犬上―滋賀県犬上郡のあたり。○鳥籠の山―近江国の歌枕。今の滋賀県彦根市正法寺町不知川の北岸にある正法寺山。「参考」「いぬかみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな」(古今集・墨滅歌)。○不知哉川―近江国、今の滋賀県の靈仙山より発し、彦根市の西部を流れて琵琶湖へ注ぐ大堀川のこと。○道行きぶり―旅の途中で擦れ違ふこと。ここは旅の道中。○「日数経る」の歌―「鳥籠」は「床」を掛ける。「床」と「塵」、「日数」と「積る」は各々に縁語。

〔参考〕「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏のはな」(古今集・夏・躬恒)。○「不知哉河」の歌―「犬上の鳥籠の山なる不知也川不知とを聞かせわが名告らすな」(万葉集・卷十一)。「いぬがみやとこの山なるいさらがはいさとこたへてわがなもらすな」(古今六帖)の歌を前提に、我が名を洩らしても、誰も知る人は

いないと自嘲的な発想をとる。○里びたる犬の……答むるもおかし―ここは句宮が宇治の浮舟を訪れる場面の、「宮は、御馬にて、すこし速く立ち給へるに、里びたる声したる犬どもの、出で来て、の、しるも、いと、恐ろしく」「物咎めする犬の声」(源氏物語・浮舟)を念頭に置く。因みにこの犬の場面は、中世歌人にも、「さとびたる犬の声にぞきこえつる竹より奥の人の家は」(拾遺愚草)、「ぬししらぬをかべのさとをきてとへばこたへぬさきにいぬぞとがむる」(秋篠月清集)のように、よく取材された。「答むるもおかし」と評したのは、「犬上」の地名にまさしく犬がかかりをもったことや、「源氏物語」を重ねて見たことによる感想だろう。○「暮(れ)ぬ間に」の歌―この歌を「戲言」としたのは、犬を登場させたり、発想が奇抜なことによるか。

〔通釈〕武佐の宿とかいう所を歩き過ぎて、愛知川にさしかかった時、道路の傍に、由緒ありそうな木高い杉群のなかに、神々しい鳥居が立っているのが目にとまった。田畑を犁き返している下賤な男に(ここはどこかと)尋ねると、「老蘇の杜」と答えた。ほんとうに四十歳の身で板を越えるのも苦しい道中なので、しばらく休息しながら、老蘇という名を聞くだけでも袖が濡れることよ。今では我が身にかかる老ではないが、老蘇の杜の下露に。

犬上や鳥籠の山、不知哉川などのあり場所を旅の道中で尋ねてみました。

春の日数が過ぎ、散った桜はもう塵のように積りもしないのに、まだそこに花の塵があるかのように、鳥籠の山風が吹き払っていることよ。

「いさや川」ではないが、たとえ私の名を洩らしても、誰が知っているであろうか(誰も私を知ってなどいない)。

犬上はその名のように、里びた犬どもが旅人に向って、仰仰しく責めたてるのは面白い。

日の暮れない間は、犬どもよ、私を咎めだてしてくれな。犬上の

里はあつても、ここに宿を借るつもりはないから、これはふざけた歌というのがふさわしい。

四 為尹卿と小野の庄・細川の庄

小野の云(ふ)所を過るに、故冷泉大納言為尹卿は、和歌の〔道の〕長者にていませしかども、時移り世くだれるにや、この道も廢れ果(て)ぬるを、三年ばかりの先にて侍(り)しやらむ、内大臣家より千首の歌を奉らしめ給ふべきよし、仰(せ)られたるに、述懐の歌の中に、

いかにせむ小野の山柴こと絶へて猶立てかぬる宿の煙を

おほけな(き)身の願ひにはあらじかしいつか結ばむ細川の水
近江の小野の庄、播磨の細川は、和歌所の永領にて、五条の三品より変らざりしかども、道の衰へに従ひて、武家の半濟など云(ふ)こととやらむに成(り)つつ、家の風も弱り行くさまなるを、此(の)つるでに、聞へあげ給ふなるべし。其(の)年の冬か
とよ、細川の庄を返し付られて、やがて小野をも、今かたつかた渡さるべしなどの御あらまし有(り)と聞へし。誠に万を恵み給ふ御心ざし、かたじけなく承(り)し也。時の管領右京兆(入道殿)より、施行にそへて歌をつかはさるる贈答など有(り)しを、

こなたかなたに取(り)つぎ奉りしかども、〔歌の〕かたちも覚え
ずなりぬ。やがて正二位大納言に上りなどし給(ひ)て、和歌の
道を二たびおこし給ふかともみし程に、あくる年の春の花の夢に
先立(ち)て、雲と消え霞と隔たり給(ひ)しこそ、衰れに悲しか
りしか。今このてすさびに書き加へ侍(る)に付(け)て、懐旧の
泪水茎(に)そひ侍(る)哉。

〔校異〕①故冷泉―故新(早・扶・中・群)。②〔道の〕―底本ナシ。
他の諸本で補訂。③くたれる―くたりぬる(早・扶・中・群)。④三
とせはかりのさきにて侍しやらむ―ナシ(扶・中・群)。⑤おほけな
〔き〕―底本「おほけなむ」、他の諸本で校訂。⑥小野の―小野(扶・中・
群)。⑦はんせい―わむせい(早・扶・中・群)。⑧、やらむ―ナシ(早・
扶・中・群)。⑨給ふ―給ひける(早・扶・中・群)。⑩かとよ―ナシ
(早・扶・中・群)。⑪付られて―つかはされ(早・扶・中・群)。
⑫今かたつかた―ナシ(早・扶・中・群)。⑬〔入道殿〕―底本ナシ、
他の諸本で補訂。⑭施行―知行(扶・中・群)。⑮歌をつかはさる、
―ナシ(早・扶・中・群)。⑯なと―なとの(早・扶・中・群)。
⑰〔歌の〕―底本ナシ、他の諸本で補訂。⑱正二位―正三位(扶・中・
群)。⑲すさび―すさみ(早・扶・中・群)。⑳付て―付ても(早・扶・
中・群)。㉑〔に〕―底本ナシ、他の諸本で補訂。㉒哉―なり(扶・中・
群)。

〔語釈〕○小野―滋賀県彦根市小野町。○故冷泉大納言為尹卿―冷泉
為邦の子息。祖父為秀の猶子。康安元年(一一三六)生れ、応永二十
四年(一四一七)正月二十五日没。享年五十七。応永の中末年より宮
廷歌壇で活躍。「為尹卿千首」が現存。○三年ばかりの先―現在は応
永二十五年(一四一八)だから、応永二十二年(一四一五)頃をさ

す。○内大臣家一足利義持（至徳三年一応永三十五年）のこと。義満の子。四代將軍。堯孝らの歌人を厚遇。応永十六年に内大臣。応永二十六年に内大臣を辞す。○千首の歌一「為尹千首」のこと。足利義持の命を受け、応永二十二年に詠進。奥書「這千首可詠進一之由、去八月廿四日從三室町殿勝定院蒙仰、同月八日持參之、応永二十二年十月十日」。○「いかにせむ」の歌一「為尹千首」に「寄煙述懐」（九二六）の歌題でみえる。小野庄を召し上げられたことの歎き。○「おほけなき」の歌一「為尹千首」に「寄河述懐」（九三七）の歌題でみえる。細川の庄を取り上げられたことを嘆息。○細川一播磨国美囊郡、現在の兵庫県三木市細川町にあった庄園のこと。○和歌所一「撰和歌所」の略。勅撰集編纂事務所とも言うべきもの。○永領一その土地を子孫代にわたって領有知行すること。またその領地。○五条の三品一藤原俊成（永久二年一永久元年）のこと。通称は五条三位。「千載集」の撰者で当代歌壇の重鎮。○半濟一室町初期、幕府が軍費を調達するため、特定の寺社本所領国衙領などの年貢の半分を一年を限って武士に与えた制度。○家の風一「家風」の訓読。家に代代伝えられたならわし。ここは和歌の道をさす。〔参考〕「君もしれ家のかぜをばふかせても猶松ことの身にのころとは」（為尹千首・九二四）。○此（の）つるで一「為尹千首」を献進するとき。○其（の）年の冬一応永二十二年十月に詠進してまもなくのころ。○万を恵み給ふ御心ざし一足利義持、足利幕府に対する深謝と鑽仰の気持。○管領右京兆（入道殿）一細川満元（永和四年一応永三十三年）のこと。応永十九年から二十八年まで管領。○正二位大納言一為尹のこと。応永二十二年三月二十八日、権大納言。○あくる年の春一為尹は応永二十四年正月二十五日に死去。○水葦一筆・筆跡のこと。

〔通釈〕小野という所を行き過ぎたとき（思い出した）、今は亡き為尹卿が、歌道の長者であつたけれども、時代が移り変つて、世が衰えたせいであろうか、歌道も廢れ果てていたが、三年ほど前のことだつ

たでしょうか、内大臣（足利義持）より千首歌を献上するようにと仰せられた際、述懐の御氣持を詠じた次の歌があつた。

どうすればよからう、小野の山で採つた柴もすつかりなくなり、もう立てることも難しくたつた宿の煙を。

おそれ多い身の願ひとは思いません。細川の水を結ぶのはいつのことか。

近江の国の小野の庄と播磨の国の細川の庄とは、和歌所の永領で、俊成の頃から変らなかつたが、道の衰退に従ひ、武家の半濟法とか言うことになり、和歌の風も弱つて行くさまを、この詠進する和歌に込めて献上されたのである。ちょうどその年の冬のことであつたか、かの細川の庄が返還され、まもなく小野の庄園も半分召し上げられていたのを、もとに戻すべきだとの御意向であつたと仄聞しました。ほんとうに万事に恵みを与えられる御芳志をかたじけなく思ったことです。当時管領であつた細川満元殿から、命令書に和歌を添えてよこされ、その贈答歌などもありましたが、あちらとこちら側を取り継ぎしましたが、その歌の内容はもう覚えていません。まもなく（為尹卿は）、正二位大納言に昇任され、和歌の道を再興なさるだらうと思つている矢先に、翌年の春の桜の花の咲くのを夢みるのに先立つて、雲のように消え、霞に隔てられるように亡くなられたのは、衰れで悲しかったことです。今、その折のことを、この手慰みに書き加えるにつけても、昔を思い出す涙が筆跡に添つて流れ出てきます。

〔考〕○和歌所の永領一「続古今集」の撰集以降、撰者は和歌所を私邸の一角に設置したので、後世、御子左家の私有地である小野の庄を和歌所の領有地と誤認されることになった。○正二位大納言一扶桑本系は「正三位」とするが、為尹は応永二十一年六月九日に「正二位」となつてゐる。底本が正しい。

五 摺針峠を越えて青野が原へ

摺針を越えしにぞ、都の山も隠れ果(て)ぬる。

今ははや目にもかからず古郷の都の山は雲隠れつつ

番馬・醒が井など云(ふ)所よりは、山ふところなる里続きにて、

水の流れ心細く、常磐木に緑そへたる若葉の影木暗く、松の藤

浪・岸の山吹、えもいはぬ春を残し顔也。

岩根洩る清水に春の面影をとめてや帰る松の藤浪

今夜は、山中に留まりぬ。弥生の末なれども、所がらにや、山

嵐もなを荒ましく、そぞろ寒き心地して、夜もすがら火など焼

き明かして、

春ながら伊吹嵐は夜寒にて真柴折(り)焼く美濃の山中

①美濃の、中山はなを東也。

関の藤川朝渡りしつつ、不破に着きぬ。

昔だに荒れぬと聞きし宿ながらいかで住むらむ不破の関守

野上など云(ふ)所は、里もかすかにして浮れ女もなし。青野が

原に出(で)たれば、国の境遙かに、南の方、はるぐと山も見

えず。

命あらば花に帰らむ春草の青野が原を今日は行くとも

〔校異〕①よりは―より(早・扶・中・群)。②夜もすから……あかして―ナシ(扶・中・群)。③ナシ―まとろまれす(早・扶・中・群)。④美濃、……ひかし也―ナシ(早・扶・中・群)。⑤つきぬ―つく(扶・中・群)。⑥して―ナシ(扶・中・群)。

〔語釈〕○摺針峠―滋賀県彦根市と米原町の間に峠。旧中山道の難所。鳥居宿と番場宿との間にあった。○「今ははや」の歌―都の山が視野から消えたことで、都への離れ難さを詠嘆する。「雲」と「かかる」は縁語。〔参考〕「道すがら心もそらにながめやるみやこの山の雲がくれぬる」(千載集・羈旅・待賢門院堀川)。○番馬―滋賀県坂田郡米原町番馬。息長川の南岸、摺針峠にあった山駅。○醒が井―近江国の歌枕。滋賀県坂田郡米原町醒が井。関ヶ原の狭隘部にある交通の要所で、中山道の宿場町、加茂神社近くに湧水がある。「(夢が)醒む」を掛けて歌に詠まれる。○松の藤浪―松に這いかかる藤の花を浪に比喩。○「岩根洩る」の歌―清水に面影を映す藤の花を介して、惜春の情を詠出。「浪」と「かへる」は縁語。○山中―美濃国、今の岐阜県関ヶ原町山中。「自二京都一至二鎌倉一宿次第、……山中美乃國」(経覚私要抄・応仁二年末。「山中といふ所を過るとて」(藤河の記)。○荒ましく―荒々しい。「風の音も、いとあらましう、霜深き曉に」(源氏物語・浮舟)など、「源氏物語」の世界に多い風の吹くさま。○「春ながら」の歌―「伊吹嵐」は近江国(滋賀県)と美濃国(岐阜県)の境にある伊吹山から吹き下す激しく寒い風として和歌に古くから詠まれた。春なのに、伊吹嵐の寒さに焚火で暖をとる風景。〔参考〕「雪をわけておろすいぶきのやまかせにこまうちなづむせきのふぢかは」(如願法師集)。「ざりともといぶきおろしは夜さむにてさせもが露に松虫のこゑ」(延文百首、為重)。○美濃の中山―岐阜県にある南宮山のこと。不破の中山とも呼ぶ。○関の藤川―岐阜県不破郡関ヶ原町の不破の関の傍を流れる川。〔参考〕「みののくに関のふぢ河たえずして君につかへむよるづよまでに」(古今集・神遊歌。○朝渡り―朝に川などを渡る

こと。「参考」「岩もる水のすさまじき山／あふ坂や関のを川のあさ渡り 心敬」(竹林抄・第七)。○不破―美濃の歌枕。今の岐阜県不破郡関ヶ原町松尾のあたり。○「昔だに」の歌―「人すまぬふはの関屋のいたびさしあれにし後はただ秋のかぜ」(新古今集・雑中・撰政太政大臣)を念頭にする。○野上―岐阜県不破郡関ヶ原町野上。○浮れ女―遊女のこと。野上に遊女のいたことは、「野がみといふ所に着きぬ。そこに遊女ども出でて来て」(更級日記)とみえる。ここは藤原定家の「寄傀儡恋」歌題の「ひと夜かすのがみの里の草枕むすびすてける人の契を」(拾遺愚草)を念頭にして「浮れ女もなし」とする。○青野が原―岐阜県大垣市青野町附近一帯の野原。「参考」「原郭公 いぶき山さしも待ちつる郭公青野が原をやすく過ぎぬる」(為尹千首)。「あをのが原を過侍れば、むかし、武士のありしが、うちじにしたる所とかいへり」(藤河の記)。○「命あらば」の歌―「春草の青野が原」は、春草が青く茂る青野の意。「参考」「いのちあらばいまかへりこんつのくにのなにはほりへのあしのうらばに」(後拾遺集・別・大江嘉言)。

〔通釈〕摺針峠を越えて、都の山もすっかり隠れてしまった。

今ではもう視野に入らなくなつてしまつたことよ。我が故郷である都の山は雲に隠れたまま。

番馬・醒が井などという所からは、山懐の里が続き、水の細い流れも心細くて、常磐木のあたりに緑色になつた若葉が木暗くおおい、松に這いかかる藤の花も、岸边に咲く山吹もすばらしい春の季節をまだ残している風情である。

岩の根方から洩れてくる清水に、春は面影をとどめて去つて行くの
か、松に咲く藤浪とともに。

今夜は、山中にとまつた。三月の末だというのに、土地柄のせいであらうか、山風も荒々しく吹いて、何となく寒い気がして、一晩中、火など焼いて夜を明かして、

今はもう春だというのに、夜の伊吹風は寒く吹きおろすので、真柴

を焼いて暖をとる美濃の山中であることよ。

美濃の中山はもつと東の方である。

関の藤川を朝渡りしながら不破に着いた。

昔でさえ荒れてしまつていたと聞いていた宿なのに、今、不破の関守はどのようにして住んでいるのであろうか。

野上などという所は、人里もほんのわずかで、遊女の姿も見えない。青野が原に出てみると、国の境は遙かで、南の方は遠くひらけて、山も目に入らない。

もし我が命があるならば、花の季節には再び帰つてこよう、春草の青く茂る青野が原を今日過ぎて行こうとも。

〔考〕○美濃の中山はなを東也―松平本以外にみえない本文。これは歌の「美濃の山中」を「美濃の中山」との誤認を避けるために付した注記か。正徹自身、あるいは後人の注か判然としない。

六 舟着き場の老人

墨俣川は、美濃・尾張の境とかや。川岸にうちのぞみたれば、舟は向ひにあるほどにて、時移るまで眺め居ぬ。とばかり有(り)て、里の子の、芹かなにぞ筐に摘み持ちたる三、四人、翁の老かがまりたるなどぞ、乗り具して来たる。童部の、舟より下りかね侍るを、子にや孫にや、助け下ろして、我もいみじう苦しげなるも、何となく哀れにぞ見侍(り)し。水鳥どもの、川洲に群がりて居たる、いと面白し。

舟人も子を思ふ道ぞ水鳥の墨俣川は浪心せよ。

〔校異〕①さかひーさかへ(早)。②川きしーきし(扶・中・群)。
③なかめー誘ひ(扶・中・群)。④子のー子(扶・中・群)。⑤なにそ
ーなにか(扶・中・群)。⑥たすけおろしてーたすけおろしなとして
(早・扶・中・群)。⑦むらかりてーむらかり(早・扶・中・群)。
⑧舟人もー舟人もなを(早・扶・中・群)。⑨道そーナシ(早・扶・中・
群)。

〔語釈〕○墨俣川ー岐阜県安八郡墨俣町付近を流れる川。今は長良川
の別名だが、当時は木曾川、揖斐川、叡川が注ぐ大河であった。「美
濃尾張の境にもなりぬ。すのまたとかや、広々とおびただぞしき川あ
り」(うたたね)。○筐ー目のこまかい竹籠。「参考」「ゆきて見ぬ人も
しのべと春の野のかたみにつめるわかかなりけり」(新古今集・春上・
紀貫之)。○水鳥どもの、川洲に群がりゐたる、いと面白しー川洲の
水鳥を見て「いと面白し」と感興を催したのは、「源氏物語」(浮舟)
の「山の方は、霞へだて、寒き洲崎に立てる笠鷺の姿も、所がらは、
いと、をかしう見ゆるに」なども想起していたためか。○「舟人も」
の歌ー「水鳥の墨俣川」は「水鳥の巢」または「洲」を掛けているか。
〔参考〕「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬる
かな」(後撰集・雜一・兼輔)。

〔通釈〕墨俣川は美濃と尾張の国との境をなす川ということである。
その川岸に出て眺めてみると、舟が向う岸にいたときとて、時が移る
間、しばらく眺めて座っていた。しばらくして里の子で、芹なんかを
摘んだ筐を持ったものが、三、四人(それに)腰が老いかがまった翁
などが、(舟に)乗って(こちらの)岸にやって来た。童部で、舟か
ら下りかねているのを、子か孫であろうか、翁はその子を手助けして
下してやり、自分も大そう苦しうにしている様子を見るのも、なん
となく哀れを催したことです。水鳥たちが川洲の辺に群がっているの
も興味あるさまである。

舟に乗っている人も、我が子のことをしきりに切なく思う旅である

ことだ。どうか水鳥が洲にいる墨俣川の浪よ、心してほしい(波を
荒立てないでほしい)。
〔考〕恐ろしくて舟から下りかねている童を助け下ろす翁に対する作
者の慈愛にみちたまなざしが印象深い。正徹には「見る物きく物、い
づれもしるし」(兼載雑談)たという「洛陽之記」という作品があっ
たというが、こういった人間観察も、彼の歌風と根底で脈絡を有して
いるといえよう。

七 黒田の里の滞在記

足近・及など〔も〕同じやうに越え過(ぎ)ぬ。黒田と云(ふ)所に、
古へ嬰子のほどより見はぐくみし人の、今は誠の親のよすがに
てありと聞きし、道よりも尋ぬべき家居のやう「人に」問ひな
どして案内したるに、限りなく聞き嬉びつつ、さるは親めく人も、
都にあるほどなりしを、若き心にとかくいたはり慰めなどしつ
つありふるに、方便出(で)きたる心地して、都の物語して明け
暮(ら)し侍(り)しも哀れ也。思ひ立(ち)ぬれば、東の果(て)ま
でもと思ひしかども、爰にとどめられつつ、やうく卯月に成
(り)ぬ。此(の)所のさま、前も後も田の面にて、林は〔軒〕近く、
いささ群竹めぐれり。民の家、所々に萱が〔軒〕、蘆の垣穂さへ、
さながら夏麻の陰に隠され、蓬・葎に門を閉ぢたり。都より東
へ行き通ふ旅人の過ぐる道の堤も、ただこの垣〔穂〕の外なれば、

群がり通る駒の足音も、物騒がしき折もあるべし。早稲田に下り立つ田子の、声く「にうたひ、夜は蛙の」耳かしがましきなど、珍しき心地ぞせし。庭の木の下に、卯(の)花のほのかに咲き出(で)たる、時知り顔におかしき夕に、

夜もすがら光は見せよむば玉の黒田の里に咲ける卯の花

墨染の黒田の早苗取(る)賤や夕をかけて袖濡らすらむ

此(の)所は、古き歌枕などによめる歌見え。黒田川はあれども、美濃の国とかや、尋(ぬ)べし。

〔校異〕①〔も〕―底本ナシ。諸本で補訂。②見―ナシ(早・扶・中・群)。③家ゐのやう―所(早・扶・中・群)。④〔人に〕―底本ナシ。諸本で補訂。⑤わかき―わか(扶・中・群)。⑥つ、―ナシ(扶・中・群)。⑦きたる―きぬる(早・扶・中・群)。⑧物語―物語など(早・扶・中・群)。⑨して―しつ、(早・扶・中・群)。⑩あけ―明し(扶・中・群)。⑪思ひ立ぬれは……と、められつ、―ナシ(早・扶・中・群)。この本文のかわりに「かくて」がある。⑫〔軒〕―底本は「斬」。次の「かやが軒」も「斬」を諸本で校訂。⑬に―ナシ(早・扶・中・群)。⑭かよふ―かふ(早・扶・中・群)。⑮道のつ、みも―つ、みのみち(早・扶・中・群)。⑯〔穂〕―底本は「尾」。諸本で校訂。⑰〔にうたひ、夜は蛙の〕―底本ナシ。脱落とみなして諸本で補訂。⑱木の―木(早・扶・中・群)。⑲さき出たる―さきたるを(早・扶・中・群)。⑳ときしりかほにおかしき夕に―ナシ(早・扶・中・群)。㉑なとに―なとにも(早・扶・中・群)。

〔語釈〕○足近―岐阜県羽島市足近町。○及―岐阜県羽島郡笠松町北及のあたり。木曾川の西岸に沿う。○黒田―愛知県葉栗郡木曾川町黒

田のあたり。○方便―冒頭部分の「しれる方便もなくして」を念頭におく。ようやく生活をおくる手づるを得た感慨。○思ひ立(ち)ぬれば、東の果(て)まで……―当初、旅立ったときは、東国まで漂泊する決意であったことを吐露。○林は〔軒〕近く―家の近くに林があるさま。

「林ノ木チカケレバ、爪木ヲ拾ウニニシカラズ」(方丈記・大福光寺本)。○いささ群竹―小さな竹の茂み。〔参考〕「まどちかきいささむら竹風ふけば秋におどろく夏の夜の夢」(新古今集・夏・公継)。○萱が軒―萱でふいた屋根。〔参考〕「さみだれは日かずへにけりあづまのかやがのきばのしたくつるまで」(金葉集・夏・定通)。○蘆の垣穂―蘆を結んで作った垣。〔参考〕「あしがきにひまなくかかるとのいの物むつかしくしげるわがこひ」(金葉集・恋下・経信)。○夏麻―夏の麻。〔参考〕「我におとる人こそなけれ山里になつぞひきをるしばぶるひまで」(頼政集)。『新編国歌大観』はこの歌を「なつぞ」とするが、「夏麻」とみる方がよい。○蓬・葎に門を閉ぢ―「蓬」は山野などに自生する菊科の多年草。「葎」は繁茂した雑草。〔参考〕「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり」(拾遺集・秋・惠慶法師)。○早稲田―わせの稲を作る田。○田子の声く―〔参考〕「旅行けばさをりの田歌国により所につけて声ぞかはれる」(正徹物語・草根集卷四)。○時知り顔―四月といえは卯の花の咲く卯月。その時節をわきまえているように咲く卯の花に、風情をみたのである。○「夜もすがら」の歌―黒田の里の「黒」と卯の花の「白」の対照の妙。白い卯の花を月光とからめた発想歌。〔参考〕「うの花のしららにさける夕ぐれはしづのかきねぞ月夜なりける」(堀河百首・仲実)。「やみなれど月の光ぞさしてける卯の花さけるをのほそ道」(堀河百首・基俊)。○「墨染の」の歌―「墨染の」は「暗し」「黒」にかかる枕詞。「夕をかけて」は「夕方まで」と「木綿を掛ける」の両意。〔参考〕「さなへとる田子は恋すとなけれども苗代水に袖ぞぬれぬる」(堀河百首・永縁)。○此(の)所は……―確かに黒田の里は古歌に詠まれ

ることが少ない。「をちこちも今はた見えむばたまのくろだのさとの夕やみの空」(夫木抄・為相)などは、黒田の里を詠じた珍しい歌。○黒田川はあれど一歌に詠まれる黒田川はあるがの意か。黒田川は美濃国、今の岐阜県を流れる川というが、今その所在は未詳。(参考)「めにたてぬ人なかりけりむば玉のくろ田の河によれる白波」(歌枕名寄・長明)。

〔通釈〕足近や及の地も同じように越え過ぎた。黒田という所に、その昔、幼児の頃から面倒をみた子が、今までは本当の親の縁でここに住んでいることを聞き、道中より訪問すべき住居の様子などを人に尋ねなどして訪れたところ、(私のことを)聞いて、とても嬉んでくれた。一方、親らしい人も、ちょうど都にでかけていたときとて、若い心にあれこれいたわり慰めなどしながらくらすうちに、頼りになる縁者を得たような気持がして、彼と都の話などして、あかしくらしたのも、しんみり情趣があったことです。旅を思い立ったときには、東国の果てまでも行こうと考えていたが、ここに留められながら、ようやく四月になった。

この所の様子は、前も後も田んぼで、林が家の近くにあり、竹の茂みが家を取りまいていて。民家が所々にあり、その萱ぶき屋根や蘆垣でさえ、すっかり夏麻の陰に隠れてしまい、蓬や葎が繁茂して門を閉ざしている。都から東国へ行き通う旅人の行き過ぎる土手沿いの堤も、この垣のほんの向い側なので、群れて通過する馬の足音も物騒しく感ずる時もあるだろう。稲を作る田に下り立っている農夫が声々にうたい、夜は蛙の声がうるさく聞えるのなども、物珍しい気がした。庭の木の下に、卯の花がほんのり咲いている様子も、いかにも時節をわきまえているような、そんな情趣ある夕暮に、

暗いという地名の黒田の里に咲いている卯の花よ、一晩中、明るい光を見せておくれ。

黒田の田で早苗を採っている農夫は夕方になるまでずっと袖を水で

濡らすであろう。

この所を、詠じた歌は、古い歌枕などにも見当たらない。歌に詠まれてきた「黒田川」はあるけれども、それは美濃の国にあるとかいうことだ。ひとつ訪ねてみよう。

(平成二年四月十六日受理)
(未完)